

審査の結果の要旨

氏名 丸田 伯子

本研究は慢性期分裂病患者に対して小規模な開放病棟で治療を行った過程で、分裂病患者の症状行動が改善する転機として重要と考えられた患者の行動パターンの変化について、自験例5例についてレトロスペクティブに考察し、下記の結果を得たものである。

1. 入院時の時点で、慢性期にあった5症例には基礎的生活行動、病棟生活における役割や約束事に依拠した行動の遂行、対人状況にふさわしい感情表出、日常生活における対人交流、社会的規範の受容、という行動レベルの障害を指摘することができた。これらを改善することが当面の治療課題として重要と考えられた。

2. 入院後、一定の治療環境のもとで上記の生活行動が改善していく過程で、患者たちが病棟生活における自由な時間に何らかの自主的な活動を始めようとする姿勢が現れた。筆者は、これらの行動にいくつかの局面があることを指摘した。すなわち、まず偶然にあるいは思いつきによって始められた自発行動が短期間で終わる局面を見出したので、これを「一時的自発行動」とした。次に、これらの「一時的自発行動」のうち、継続されて新たな行動パターンとして定着した局面について、これを「継続的自発行動」とした。さらに、「継続的自発行動」を体験するときの感情や身体感覚が言語化される局面が現れ、これらが患者にとって「快」あるいは「楽しみ」の体験であると語られた時点でこれらの「継続的自発行動」を「遊び」的行動と呼ぶことにした。

3. 「遊び」的行動がいかに「遊び」と関連しているのか、また筆者のこのような視点が上記の治療課題を踏まえた慢性期分裂病患者の治療にとってどのように有効であるのか、という点について考察した。「遊び」的行動は、病棟生活で与えられる自由を背景として自主的に行われ、それぞれが一定のルールを持った行動であり、いずれもが楽しみの感情を伴っている、といった特徴を備えており、理論的に「遊び」として考えることが妥当と考えられた。

4. 慢性期分裂病患者の治療を考える上で、開放的な病棟への入院治療を行うことで基本的な生活行動の改善を重視して促していく治療環境においてはルールが緩やかであるという特徴があり、治療者の姿勢はむしろ受動的である。このような環境下では、治療的な枠が緩やかに設定されている中で患者の症状や行動の変化を観察することができる。この環境を生かし、自閉的な状況にある患者の行動面に現れた変化をとらえ、治療者が自主性や社会性、活動性の改善につながる働きかけをすることが慢性期分裂病患者に対するアプローチとして有効である。

以上、本論文は慢性期分裂病患者を大学病院の開放病棟において治療した5症例についての記述のレトロスペクティブな分析から、経過中に見出された自発的な行動のうち、継続的に行われ快の体験として言語表出されるにいたったもの、すなわち「遊び」的行動に治療的意義があることを明らかにした。本研究は、慢性期分裂病患者に対する治療的アプローチの発展に重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。